

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## シルクロードの織機

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-11-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉本, 忍, 柳, 悦州<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10502/5212">http://hdl.handle.net/10502/5212</a>                          |

## 地機【IGF-3】

調査年月日 : 1998年9月10日  
 調査地 : ファシュタケ (Fashtake) 村  
 民族名 : ギーラーン (Gilan)

型式 : 地機  
 材質 : 木  
 概寸 : 全長140cm, 全幅100cm, 全高75cm  
 経糸保持方式 : 固定式  
 整経方式 : 平整経式



### 構成部品

経糸保持具 : 前部経糸保持棒 (横木)  
 <図IGF-3-a-1>  
 後部経糸保持紐  
 <IGF-3-a-2>  
 経糸間接保持具 : 前部経糸保持棒繫留用紐  
 <図IGF-3-a-3>  
 前部経糸保持棒繫留用杭  
 (2本1組) <図IGF-3-a-4>  
 後部経糸間接保持棒  
 <図IGF-3-a-5>  
 後部経糸間接保持棒固定用紐  
 <図IGF-3-a-6>  
 後部経糸間接保持棒固定用杭  
 (2本1組) <図IGF-3-a-7>  
 緯打具 : 板状緯打具  
 <図IGF-3-a-8><写真IGF-3-2>  
 その他 : 椅子<図IGF-3-a-9,10>

### 製織中の織物

織技法 : 無地平織  
 地組織 : 緯畝組織

素材 : ピニール (経糸)  
 アシ (緯糸)

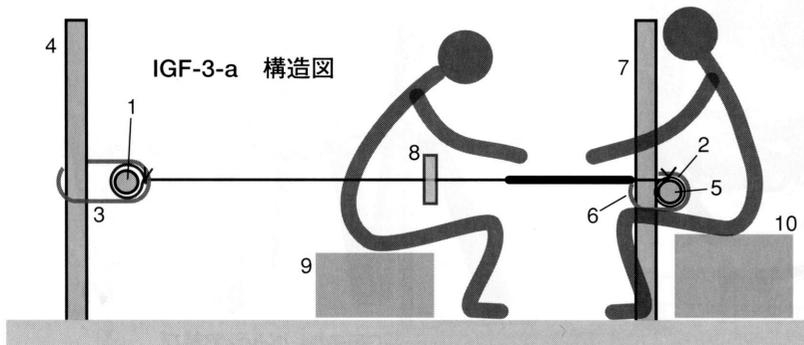
用途 : むしろ  
 経糸全長 : 132cm  
 織幅 : 42cm

織り手 : 女性2人

### 調査メモ

むしろは最近ではピニール製のマットなどの工業製品が出回るようになってきたことから、ほとんど織られていない。そのため、地機によるむしろ織りの調査は、特別に実演を依頼しておこなった。機織り作業は屋外でおこなわれた。むしろの素材は本来はすべてがアシで、経糸は通常アシを撚りあわせて紐としてもちいているが、調査時には、アシを撚った紐がなかったために、ピニール紐が代用品として使われた。緯糸に使われるアシは撚りあわされていない。地機の前部経糸保持棒は、両端が2本の繫留用の杭に紐で繋がれて、経糸の張力が調整されている。また、後部経糸間接保持棒の両端は2本の固定用の杭に紐でくくりつけられている。この地機には、開口具がない。機織りは姑と嫁の2人でおこなっていたが、姑が主体的に機織りをおこない、嫁は姑の右

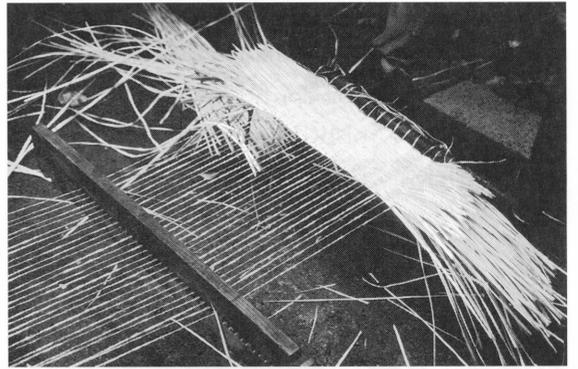
斜め前方で木箱を椅子にして腰かけて介添え役を務めていた。機織り作業では、2本の横木(前部経糸保持棒と後部経糸間接保持棒)にアシの紐を結びつけて張り渡した経糸の横で、嫁が板状の緯打具の穴に通された経糸のうちから、奇数列、あるいは偶数列の経糸を手ですくって緯糸となるアシを通していった。そして、前部経糸保持棒の前に





IGF-3-1 全景

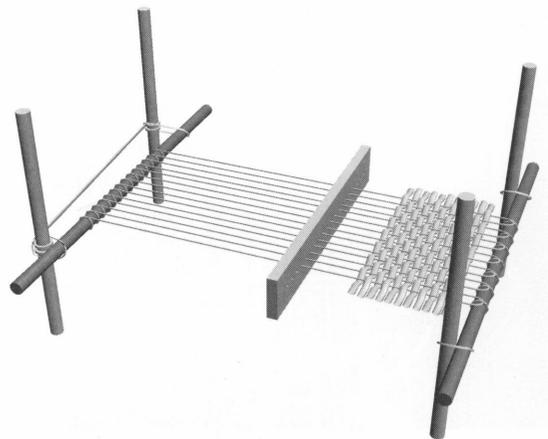
して地面に腰を下ろしている姑が緯打具で打ち込みをおこなっていた<写真IGF-3-1, -2>。織り進んだ段階では、姑は織られたむしろの下に木箱の椅子を置き、織られたむしろをあいだにしてこの椅子に腰掛けた状態で織り作業をする。なお、介添え役は織り作業に不可欠の存在ではなく、人手のない時は、1人でむしろ織りをするこもあったという。



IGF-3-3 製織途中のむしろ



IGF-3-2 緯糸の挿入



IGF-3-b 模式図

## 地機【IGJ-1】

調査年月日 : 1998年9月12日  
 調査地 : ゲルテ (Gerdeh) 村  
 民族名 : アゼルバイジャン  
 (Azerbaijdzhan)

型式 : 地機  
 材質 : 木  
 概寸 : 全長1800cm, 全幅80cm, 全高110cm

経糸保持方式 : 固定式  
 整経方式 : 擬似輪状整経式  
 開口具設置方式 : 地組織用開口具  
 - 綜統固定・開口保持棒可動式  
 浮組織用開口具  
 - 綜統・開口保持棒可動式

### 構成部品

経糸保持具 : 前部経糸保持棒 (杭)  
 <図IGJ-1-a-1>  
 後部経糸保持棒 (横木)  
 <図IGJ-1-a-2>  
 経糸間接保持具 : 後部経糸保持棒繫留用杭  
 (2本1組) <図IGJ-1-a-3>  
 後部経糸保持棒繫留用紐  
 <図IGJ-1-a-4>  
 経糸中継棒 : <図IGJ-1-a-5>  
 開口具 : 輪状綜統 (地綜統)  
 <図IGJ-1-a-6>  
 輪状綜統付属糸綜統 (紋綜統1)  
 (2本) <写真IGJ-1-3-a>  
 <図IGJ-1-a-7>  
 経糸付属糸綜統 (紋綜統2)  
 (5個) <図IGJ-a-8>  
 <写真IGJ-1-4-b>  
 開口保持板 (地綜統と連係)  
 <図IGJ-1-a-9><写真IGJ-1-4-a>  
 開口保持棒 (紋綜統2と連係)



<図IGJ-1-a-10><写真IGJ-1-4-c>

開口補助具 : 浮織用経糸すくい板  
 <図IGJ-a-11><写真IGJ-1-3-b>  
 綜統固定具 : 三脚<図IGJ-1-a-12>  
 緯打具 : 刀状緯打具<図IGJ-1-a-13>  
 開口部記憶紐 : <図IGJ-1-a-14>  
 経糸整列具 : <図IGJ-1-a-15>  
 その他 : クッション<図IGJ-1-a-16>

### 製織中の織物

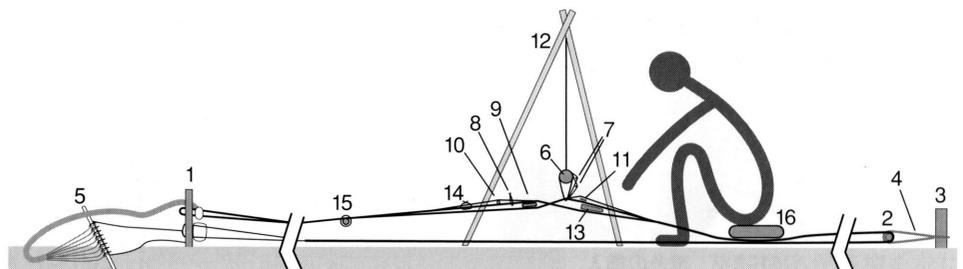
織技法 : 経縞織と経糸浮織 (昼夜織) の併用  
 地組織 : 経組織  
 素材 : 羊毛  
 用途 : カーペット, 布団カバーなど  
 経糸全長 : 5280cm (全周)  
 織幅 : 30cm

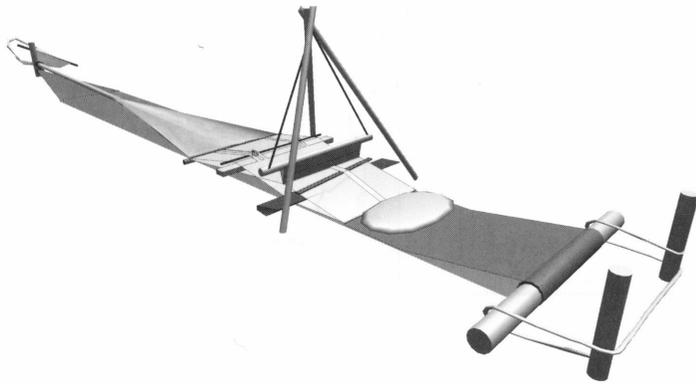
織り手 : 女性1人

### 調査メモ

機織りは屋外でおこなわれていた。この地機の経糸の整経方式は擬似輪状整経式であった。経糸中継棒を介して輪状を呈している経糸は、東ねた状態で2カ所が前部経糸保持棒 (杭) にくくられていた。くくられていない部分の経糸は、一方が後部経糸保持棒にかけわたされ、もう一方は前部経糸保持棒の前方に、東ねた状態で置かれていた。また、後部経糸

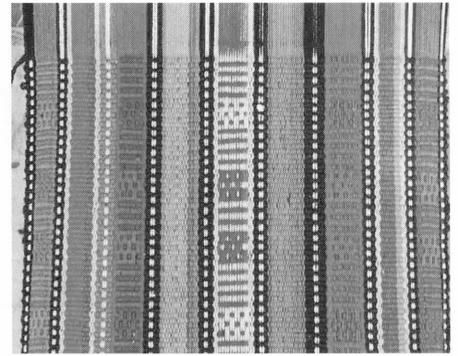
IGJ-1-a 構造図





IGJ-1-b 模式図

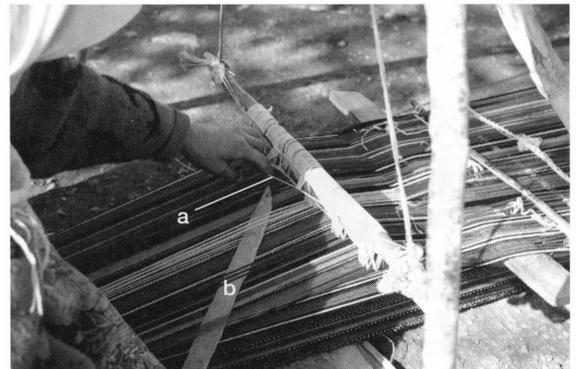
保持棒は、両端が繋留用の杭を介して紐で繋がれており、紐で引き締めることによって、経糸の張力が調整されている。開口具には、地組織を織るための部品として、輪状綜統と開口保持板があり、経糸浮織（昼夜織）の紋組織を織るための部品として、輪状綜統付属の糸綜統、経糸付属の糸綜統、開口保持棒がある。このうち、地組織を織るための開口具の設置方式は、輪状綜統固定・開口保持板可動式で、輪状綜統は、経糸をまたぐように置かれた三脚に紐で結ばれている。開口操作では、輪状綜統は動くことはなく、開口保持板を寝かせた状態で前方に遠ざけることによって、経糸が逆開口し、開口保持板を手前に寄せて、引き起こすことによって、経糸が開口する。一方、紋組織を織るための開口具の設置方式は、すべて可動式である。このうち、輪状綜統付属糸綜統は、手前に引くことによって経糸浮織の紋組織に関係する経糸が引き上げられる。また、経糸付属糸綜統は開口保持棒と組み合わせて使用されており、経糸浮織の紋組織に関係する経糸は、経糸付属糸綜統によって引き上げられる。緯打具と浮織用経糸すくい板は、ともに刀状を呈している。緯打具には、製織中の織物の経糸密度とほぼ同様の経糸擦過痕（ピッチ6本/cm）が認められた。浮織用経糸すくい板は、緯打具よりも細く薄い板で、糸綜統によって引き上げられた経糸や開口保持棒によって分離されている経糸をすくい取って、経糸の開口部を拡大し、緯糸を通しやすくするために使われている。また、経糸整列具の棒は、経糸の下面に渡されており、経糸は棒に巻いた紐で固定されている。



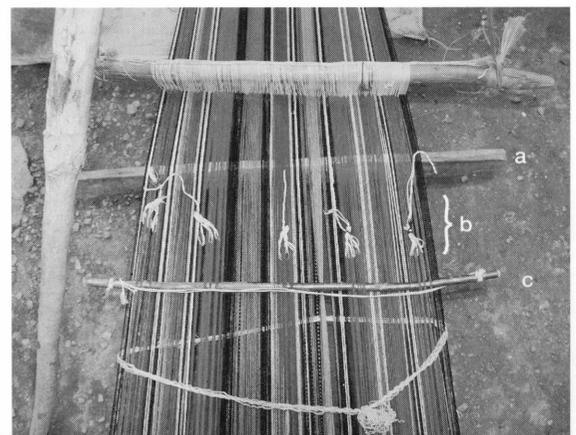
IGJ-1-1 製織途中の織物



IGJ-1-2 機織り



IGJ-1-3 輪状綜統付属糸綜統-a, 経糸すくい板-b



IGJ-1-4 開口保持棒-a, 経糸付属糸綜統-b, 開口保持棒-c

## 杵機【IFF-1】

調査年月日 : 1998年9月24日  
 調査地 : アータシュ・カデ  
 (Atash Kade) 村  
 民族名 : カシュカイ (Qashqa'i)  
 型式 : 水平式杵機  
 材質 : 金属  
 木  
 (開口保持棒、綜統固定具、座板)

概寸 : 全長262cm、全幅161cm  
 経糸保持方式 : 固定式  
 整経方式 : 平整経式  
 開口具設置方式 : 綜統固定・開口保持棒可動式

### 構成部品

機杵 : <図IFF-1-a-1>  
 経糸保持具 : 前部経糸保持棒 (横木)  
 <図IFF-1-a-2>  
 後部経糸保持棒 (横木)  
 <図IFF-1-a-3>  
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ネジ金具 (2本)  
 <図IFF-1-a-4>  
 開口具 : 輪状綜統<図IFF-1-a-5>  
 開口保持棒<図IFF-1-a-6>  
 綜統固定具 : 木片 (2個) <図IFF-1-a-7>  
 緯打具 : 櫛状緯打具<写真IFF-1-1-c>  
 緯打補助具 : 緯糸打ち締め糸  
 その他 : 座板<図IFF-1-a-8>  
 パイル糸切断用ナイフ  
 鋏<写真IFF-1-1>

### 製織中の織物

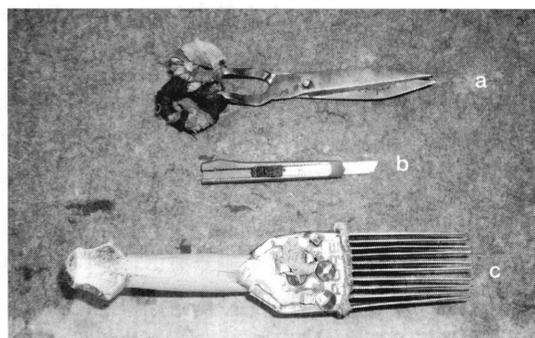
織技法 : パイル織  
 地組織 : 平織変化組織  
 素材 : 羊毛  
 用途 : カーペット  
 経糸全長 : 226cm  
 織幅 : 86.5cm



織り手 : 女性1人

### 調査メモ

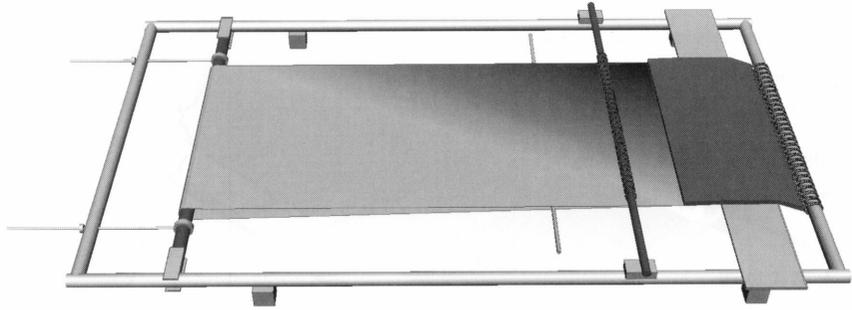
杵機は住居の室内に設置されていた。機杵は金属製のパイプで組み立てられており、後部経糸保持棒は、機杵の一部を構成している。また、前部経糸保持棒には、左右に経糸の張力調整用のネジ金具として、ボルトが取り付けられており、機杵前部の横棒を貫通したボルトをナットで締め付けることによって、経糸の張力が調整されている。織り手は織り始めのとき以外は、織られたカーペットの上に座って機織りをおこなっており、織り進むと同時に前方に移動する。座っているカーペットの下には座板があり、その両端は機杵にかけ渡されている。パイル織の糸の結びはペルシャ結びで、地組織を構成する緯糸には、太い緯糸と細い緯糸が交互に使用されていた。太い緯糸は、開口保持棒を手前に引き寄せたのちに、直接手で挿入する。



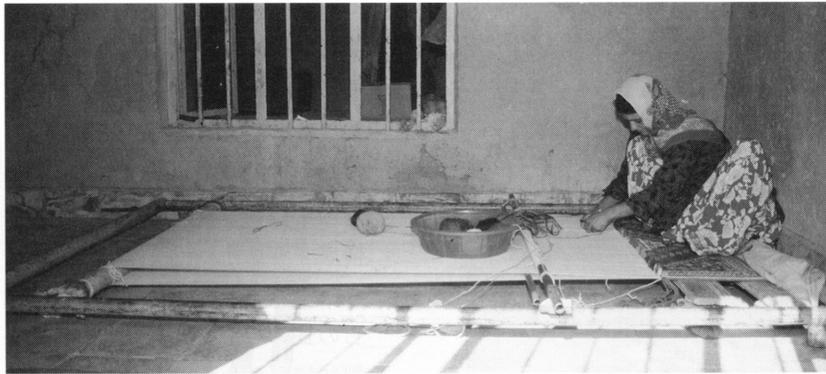
IFF-1-1 鋏-a, ナイフ-b, 櫛状緯打具-c



IFF-1-a 構造図



IFF-1-b 模式図



IFF-1-2 枠機による機織り



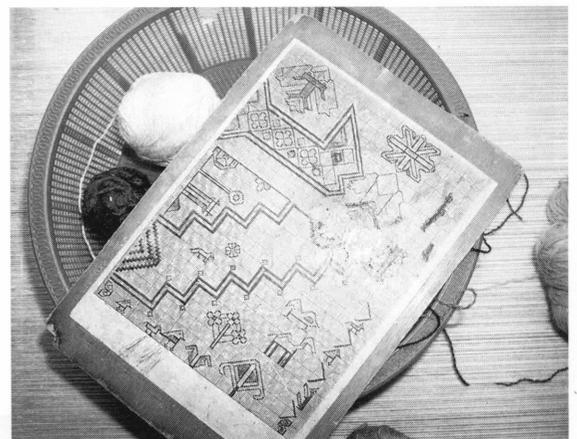
IFF-1-3 織り手



IFF-1-5 製織途中の織物

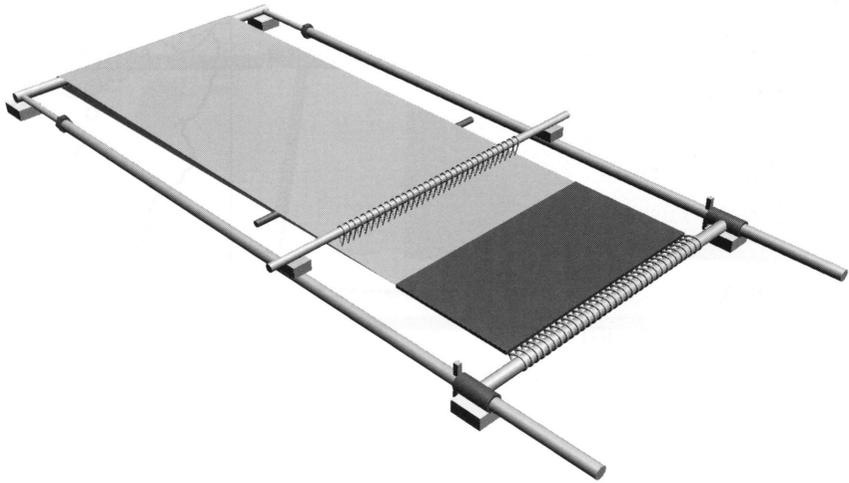


IFF-1-4 パイル糸の結び

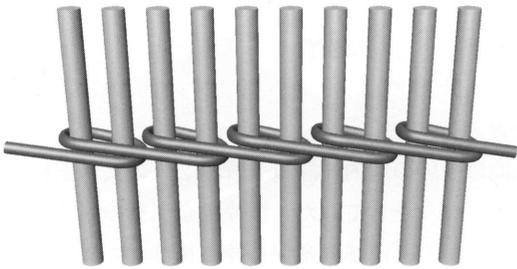


IFF-1-6 模様見本





IFF-2-b 模式図



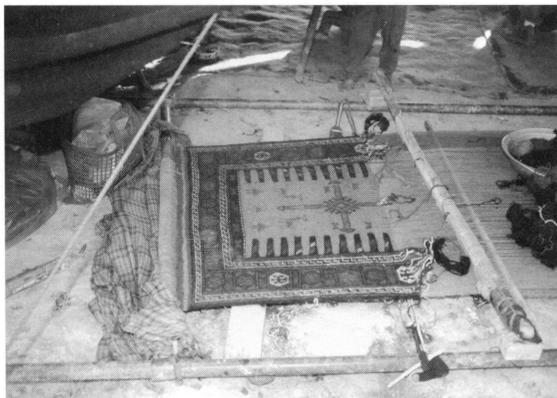
IFF-2-c 巻き編技法 (スーマク)



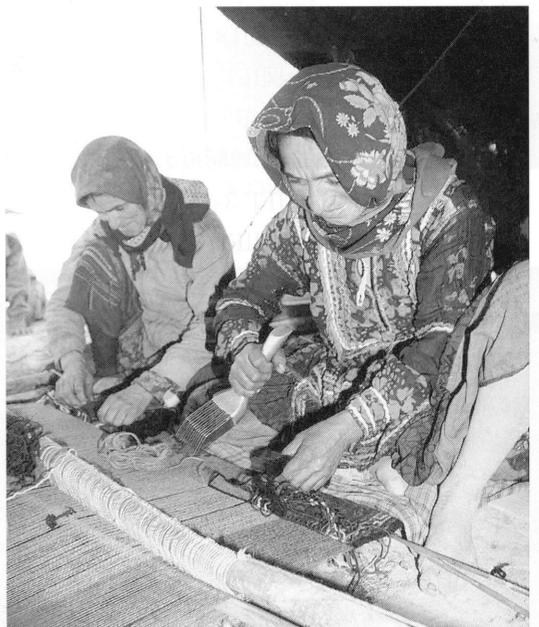
IFF-2-4 緯糸の挿入



IFF-2-2 織り手



IFF-2-3 製織途中の織物



IFF-2-5 緯打具による打ち込み